思春期・青年期を迎える被虐待児への支援
—レジリエンス（回復力）に注目して—

川口裕子[1)]・竹内直子[2)]・松浦加奈[2)]・小笠原將之[2)]・福永知子[2)]
（ 1)大阪大学医学部附属病院　神経科精神科　2)大阪大学大学院医学系研究科）

＜要　旨＞

本研究は、親からの精神的自立を発達課題とする思春期・青年期を迎える被虐待児に注目して、レジリエンスという視点から、施設群、臨床群、虐待サバイバー群の心理特性を、彼らのロールシャッハ反応から実証的に検討し、支援のありかたを考察した。施設群、臨床群の検討からは、彼らが辻（2003）のいう「原体験」を受容的に受けとめられる体験を欠いていた可能性が示唆された。また、現実対処法として①対象との直面化の回避、②孤立化防衛、③関係性を求めるといった特徴が挙げられた。虐待サバイバー群の事例検討からは、心的エネルギーの高さや現実認知の正確性が虐待の世代間伝達を回避することができた要因として挙げられた。レジリエンスをもたらすものとして、色彩反応の出現にみられる「傷つきを受けとめる力」や、許容反応にみられる「原体験を受容的に受けとめられる体験」の獲得、見えない心の働きに気づく力が重要になると考えられた。特に思春期・青年期以降の被虐待児には、自分の人生を受けとめる援助が求められる。

＜キーワード＞

被虐待児、レジリエンス、思春期・青年期、ロールシャッハ法

【はじめに】

厚生労働省の集計によると、全国の児童相談所が2007年度に対応した児童虐待に関する相談は、前年度比8.8%増の40,618件で、初めて4万件を超えた。また、同省専門委員会の報告によると、2003年7月～2006年12月の間に、都道府県が児童虐待による死亡と判断したのは247件で、虐待死も後を絶たない。児童虐待防止策、虐待する親への対応および被虐待児への支援は急務の課題である。

我が国における児童虐待をめぐる研究は、当初は児童虐待の分類や世代間伝達（intergenerational transmission）に関するものが主流であった。その後 Herman, J. L.（1992）らがトラウマの視点による研究を公表した後、PTSD や解離性障害との関連など、虐待既往に関する理解へと研究の視点が移行し、理解や支援の具体策が深まっている（中原2008）。

被虐待児の示す精神症状として、「不安や怯え」「低い自己評価」「衝動性・攻撃性」「精神発達の遅れ」「無感動や無反応」などが挙げられている（奥山1997、前田2006）。また、親に虐待された子どもたちは、自身が親になったとき、子どもを虐待する傾向を持つという説がある。近年、こうした直接的な因果関係は否定されている。しかし、このような虐待における病理モデルは、「子どもは傷つきやすく環境に対して無力な存在」「トラウマに対して脆弱性（vulnerability）を持つ存在」であり、「子ども時代のトラウマが生涯続き、ダメージを与える」という「ダメージモデル」のほうに関心が

払われてきた傾向があるという指摘がある(Wolin, S. J. &Wolin. S. 1993)。

このような傾向に反して、近年、心的外傷を受けるような環境リスクに対して「レジリエンス(resilience)」という概念が注目されている。レジリエンスという心理学用語には「弾力性」「回復力」という意味があり、「その状況（特にストレスフルな場面）で要求されることに柔軟に反応するプロセス」と定義される。さらに、広義には、ストレスに関するリスク要因に対し、「それが存在しない場合と同じかそれ以上に良い結果を生み出すよう作用するプロセス」として、個人の内的な性格特性としてだけでなく、個々の置かれた環境への適応プロセス全体をも含めて包括的に捉えられている。

実際、我々は、虐待という逆境の中で育ち、臨床症状は呈しながらも、何とか適応を試みようとする逞しい事例に出会うことがある。彼らは心的外傷を受けながらも、独自の現実対処スタイルを身につけ、生き延びようとしている。

これまで心理的な問題を抱えた人々が身につけた防衛機制は、一般に望ましくないものとされ、修正・治療の対象とされてきた。しかし、この現実対処法を、レジリエンスにつながりうる一種の適応力としてとらえ、彼らの健康促進的な力に着目する視点も重要ではないかと考える。従来、このような視点からの実証的研究は十分に行われてこなかった。

被虐待児への支援については、乳幼児期・児童期の子どもには環境を含めた「育ち直り」の支援、思春期・青年期には、「生き延びることを支える」支援が必要である。

本研究は、親からの精神的自立を発達課題とする思春期・青年期を迎える被虐待児に注目して、彼らの心理特性を、レジリエンスという視点から実証的に検討し、支援のありかたを考察することが目的である。

ロールシャッハ法には、その人の基本的な人格構造や現実対処スタイルがあらわれる。今回の研究では我々が体験した事例のロールシャッハ反応を中心に検討し、考察を行う。

【対象】

①**施設群**：児童福祉施設に入所中の小学生（高学年）・中学生で、その生育歴に被虐待体験が強く疑われた８名（男子６名、女子２名：10.8歳、SD=1.67）

②**臨床群**：医療機関を受診した中学生・高校生で、その臨床症状の背景に被虐待体験が強く疑われた５名（男子１名、女子４名：15.4歳、SD=1.67）

③**虐待サバイバー群**：医療機関を受診した母親で、その臨床症状の背景に被虐待体験が強く疑われた２名

【方法】

①家族歴、生育歴の情報収集

②認知機能の評価（新版 K 式発達検査、WISC－Ⅲ、BGT）

③心理テスト(ロールシャッハテスト、SCT、バウムテスト)実施

①②③の資料の集計および分析

各群の相互比較および個別事例の考察

【結果と考察】

対象事例の概要と、ロールシャッハテストの主要なスコア（阪大法による）を表１、２に示した。

表１　事例の概要

	事例	性別	年齢(学年)	虐待の種別	主な問題行動・臨床症状など	認知機能評価
①	1	男	9 歳(小4)	心理的虐待	高機能自閉症 or アスペルガー症候群	
	2	男	9 歳(小4)	身体的虐待	虚言。金銭持出し	DQ=85(C-A:84,L-S:84)
	3	男	10 歳(小4)	身体的虐待	ADHD	FIQ=84(VIQ=75,PIQ=97)
	4	女	10 歳(小4)	身体的虐待、育児放棄	友達とのトラブル	
	5	男	11 歳(小5)	心理的虐待	家出。金銭持ち出し	FIQ=89(VIQ=85,PIQ=96)
	6	男	11 歳(小6)	身体的虐待、心理的虐待	情緒不安定	DQ=74(C-A:80,L-S:71)
	7	女	12 歳(小6)	身体的虐待	情緒不安定	DQ=65(C-A:66,L-S:50)
	8	男	14 歳(中2)	心理的虐待	虚言。金銭持ち出し	FIQ=73(VIQ=80,PIQ=71)
②	9	男	14 歳(中2)	身体的虐待	自閉傾向	FIQ=77(VIQ=82,PIQ=76)
	10	女	14 歳(中3)	身体的虐待、心理的虐待	解離	
	11	女	15 歳(高1)	性的虐待	情緒不安定	
	12	女	16 歳(専1)	身体的虐待	解離	
	13	女	18 歳(高 3)	性的虐待	解離	
③	A	女	16 歳	身体的虐待、心理的虐待	情緒不安定	
	B	女	32 歳	身体的虐待、心理的虐待	情緒不安定	

表２　主要なスコア

事例		R	TT	R_TT AV.	RC AV.	W%	D%	d%	Dd%	M:FM	F%	ΣC	F+%	Fpm%	CS%	AS%
①	1	4	3′ 34″	10″	9.3	100	0	0	0	0:0	100	0	75	25	100	0
	2	29	7′ 57″	17.7″	1	51.7	44.8	0	3.4	0:0	86.2	0	72.4	10.3	0	100
	3	14	3′ 27″	9.2″	0.6	28.6	50	14.3	7.1	0:0	92.9	0	35.7	35.7	21.4	78.6
	4	35	8′ 09″	7.4″	0.5	5.7	74.3	14.3	5.7	0:0	88.6	0	65.7	20	11.4	88.6
	5	35	6′ 17″	5.7″	0.8	25.7	60	11.4	2.9	0:0	94.3	1	57.1	22.9	0	100
	6	27	2′ 38″	3.6″	3.6	22.2	63.5	7.4	7.4	0:0	92.6	0	63.0	11.1	0	100
	7	29	7′ 06″	9.7″	0.4	6.9	51.7	20.7	20.7	0;1	89.7	1	86.7	3.4	48.3	51.7
	8	10	4′ 43″	21.8″	3.6	60	40	0	0	0:1	90	0	70	10	0	100
②	9	10	5′ 12″	22.9″	2.8	90	10	0	0	0:0	70	2	70	10	90	10
	10	22	53′ 45″	2′ 05″	3.1	4.5	59.1	18.2	18.2	0:0	81.8	4	77.2	4.5	31.8	68.2
	11	28	16′ 12″	11.4″	1.4	57.1	42.9	0	0	2:4	50	7	57.1	10.7	39.3	10.7
	12	17	6′ 05″	15.1″	1.5	88.2	11.8	0	0	0:0	35.3	9	41.2	5.9	0	64.7
	13	19	10′ 46″	6.9″	2	63.2	36.8	0	0	0:1	73.7	3	63.2	5.2	52.6	26.3
③	A	38	8′ 53″	5.8″	1.3	60.5	36.8	0	2.6	0:2	84.2	1	55.3	18.4	2.6	97.4
	B	15	14′ 49″	19.9″	0	100	0	0	0	1:4	33.3	2	80	13.3	73.3	13.3

１．施設群、臨床群の事例検討

施設群、臨床群において特徴的であった事例８、10、13 のロールシャッハ反応の特徴を検討した。

施設群　事例８(14 歳　男児)

背景

実父より、母、本児への暴力があり、母は本児を連れて離婚。幼少時より母からの身体的虐待もあり。学童期に虚言などの問題行動出現。家の事情で２年間施設入所。12歳時に母が再婚。異父妹が出生するが、本児が子守中に事故がおこり死亡。心理的ケアを目的として、施設入所。

ロールシャッハ反応（抜粋）

Ⅰカード
＞∨∧＞∧∨∧32″ ①何かの仮面　Imp.39″
＜∧何もない 47″

【WSs：(F)：(+)，，，1：Mask：AS】
＊∧∨＜＞はカード回転の向きを示す
＊Imp.は反応を促す教示

Ⅱカード
∨＞∧∨26″ 何かの銅像。それだけ 36″

【D:F:+, , ,1 : (H)=銅像 : AS】

Ⅷカード

∨∧24″ 動物が葉っぱを食べている 30″

【W:FM:+,± , ,1 : A×Plt : AS】

スコア集計

R=10 TT=4′ 43″ R_IT AV.=21.8″ RC AV.=3.6, W:D=6:4 ,FM=1 FV=1 F=8,F+%=70%, loosely org.=1,(H)=4 顔=3,AS=10

反応の特徴

・カードを受け取りすぐ回転してから反応する
・「単語」で言い切り、それ以上の関わりは回避する
・１つのカードに１つの反応で、いろいろな意味可能性を考えにくい
・反応内容は具象的事物に限定されている
・反応決定因は「形的にそう思っただけ」としか言えない。色彩反応なく、形体と色彩の複合は立ち上がっていない
・〈どんな感じ？〉と聞かれ「普通」と答える
・動物運動反応（FM）がひとつ「動物が葉っぱを食べている」
・「何かの○○」という表現で明確化を避ける
・「銅像」「宇宙人」など脱生命化された内容
・関係性はすべて「背中合わせ」となる

臨床群　事例１０（14歳　女児）

背景

両親は一旦離婚し、再婚。３歳頃まで身体疾患で入退院を繰り返す。幼少期より母から身体的虐待が続き、４歳頃から母子ともに心理治療を受けている。中1の頃より、母がきつく叱った時、本児が一人で会話していることに母親が気づき、発達障害ではないかと疑い受診。

ロールシャッハ反応（抜粋）

Ⅰカード（図１参照）

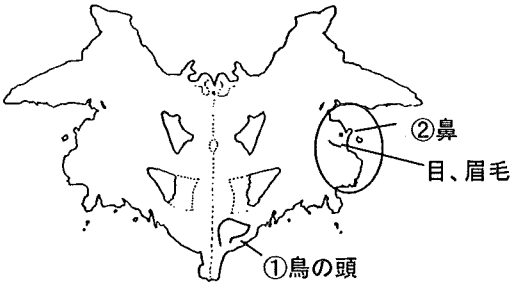
（すぐに）＜∨31″ ＞∧1′ 16″ ＜∨2′ 46″ ∧（図版を近づけ見入る）5′ 13″〈どうかな？〉5′ 25″（カードを検査者に見せて）①ここが鳥の頭に見える（①を囲む）6′ 43″ ∨7′ 30″ ②人の顔（d1）＞∧（検査者の方を見る）〈他に？〉・・・〈もう見えない？〉（うなづく）9′ 25″（以後、全ての反応でカードを検査者に見せて示す。領域を囲んで示すことが多い）

＊〈　〉は検査者の言葉

①【dr:F:+o, , ,2 : Ad : CS】

②【d:F:+o, , ,2 : Hd : AS】

図１



スコア集計

R=22(forget=1) TT=53′ 45″ R_IT AV.2′ 27″ RC AV=3,W=1 D=14 d=2 dr=5, F=18(82%), FC=1 CF=2 C/F=1,F+%=82%, organization=0, Ad+dA+Hd=7

反応の特徴

・カードを受け取り、すぐ回転。初発反応時間（R_IT）が長い
・検査者にカードを見せながら反応。反応終了を自ら告げず、検査者の目を見て指示待ち態度
・全体反応（W）はひとつだけ(Ⅴカード：チョウチョ)。普通小部分反応（ｄ）や稀有部分反応（dr）が多く、外界との関係を自分の関心の向く範囲に限定して狭く体験している
・形体反応中心。「横顔」認知が多い。横顔は実質を部分を伴わず、完結しない部分的な狭い輪郭線のみで成立し得る。対応範囲を狭く限定することで、単純化し、確実性を高めている（F+%は高い）
・色彩体験の意味づけは見られるが（Ⅸカード：火）、形体との複合は未成立。
・運動反応なし。内的に自生する動感覚の自己内認知と間接化過程の複合は見られない
・「○○の顔」など内容的にも部分反応が多く、部分対象認知レベル
・感情を交えない中立的な反応内容
・「横顔」認知が多く、対象と正面から向き合うことを回避

臨床群　事例１３（18歳　女児）

背景

父は家族に暴力的で本児も幼少時より身体的暴力を受ける。母からも身体的虐待の疑いあり。中学生時には親戚から性的虐待も受ける。不登校となり、無理矢理登校させられそうになったところ、不穏となり自殺企図。

ロールシャッハ反応（抜粋）

Ⅰカード

1″ えっ4″ ①デビル？②でも犬にも見えるかも。ちょっと違うかも。左右対称みたいな。でも∨25″ ③虫っぽく見えるかも@37″ ②´でも顔に見える∧左右対称気になるなと∨∧52″ そんな感じかな。1番初めからびっくりした。バーって。目みたいものあったから

①【WSs c :FC´:+, ±, , 1 : (dH) : QS】

②【WSs:F:+,　, , 1 : dA : CS】

③【WSs:F:+,　, , 1 : dA : CS】

Xカード

1″ あーすごい！いっぱい！えー、いろんなのいっぱいありすぎて、どれから見よう。いろんなのみんな集結っていう感じ。カラフルだし…何かわからないけど楽しそうな感じ∨∧何か見えるわけじゃないけど、カラフルだし、いっぱいあるし、明るくなる（笑）56″ はい。

【Failure】

スコア集計（反応単位が曖昧で数値は目安）

R=19(forget=1 X:failure) TT=10′ 46″ R_IT AV=6.9″ RC AV=2.1, W=12 D=7, FM=1 F=13(68%) V/F、FY、FC´、FC、C/F、C、各1, F+%=60%(Ⅷ～X : F+%=25%), loosely org.=5, H=0

反応の特徴

・カードを受け取ると瞬時に感情表出し、頻繁に回転しながら反応。Ⅳカードのみ「威圧感あるね」と初発反応時間が遅延。易刺激的に反応し、図版との適切な距離を失いがち

・対象の識別的認知力は示されているが、認知対象を「でも○○にも見えるかも？」と決定しない～できない。反応が浮動的・流動的（忘却もあり）。「虫」「生物」等の集合概念や非現実概念が多い→対象明確化を避ける

・着想を即座に見えている側（away）に位置付けて、自分の内面（home）に置くことをしない～できない

・「左右対称」「カラフル」など周囲の状況性に敏感

・認知図形と図版状況（図形から受け取った印象を含む）とが等価である

・多色彩カードの形体水準低下

・終始笑顔で過剰適応。「かわいい」「きれい」と肯定的意味づけが多い→ネガティヴなものの否認

2．施設群および臨床群の反応特徴

施設群では部分反応(D%)が中心で部分認知が優勢である。全体像と全体概念の優位性の認識が確立されていない「Do」とスコアされる反応もみられる。反応内容は具象的事物が多く、表現型も「断定型（AS）」が中心である。これらの特徴は、辻(1997)や小川ら(2005)が紹介した一般の児童が示す特徴と同様であった。

一方、反応決定因は形体要因のみを用いたもの(F%)が86.2～100%で、同年齢群で辻(1997)の示した66.2～68.1%、小川ら(2005)が示した60.65～74.16%よりも高く、色彩の意味づけをした反応(ΣC)がほとんどみられないという特徴を示した。このことからは、自分が体験したことを内面に位置づけて体験する領域が準備されていない可能性が浮かび上がる。運動反応(M:FM)もほとんどなく、自分の中にある運動感覚を間接化して、形体と複合する力は育っていない。

臨床群では、施設群にみられた形体要因に限定される傾向(F%)は減少し、周囲の状況に敏感となり、色彩や明暗・陰影を用いた多彩な反応がみられるようになり、色彩体験の実質的意味づけ(ΣC)が生じていた。ただし、形体との複合は未成立で情動統制は十分ではなかった。文章型では「思慮型(CS)」が増え、自分がなぞらえてみていることの気づきや、いろいろな可能性を考える許容性が生じつつあった。

3．被虐待児の心理特性の背景にあるもの

辻(2003)は、人間が生まれいずる前の母親の胎内生活で生じているこころの働きの体験を「原（初的）体験」と概念づけている。「原体験」は区別のない融合・合一的な体験世界である。

事例8は、いろいろな可能性で考えることができず、外側に見える具象に限定された世界に生きていた。いろいろな可能性を知る体験を準備するのは、何であるかはっきりしないままの体験を収めていることである。

事例10は、全体反応が一つしかなく、発達初期に通過すべき未熟な融合的大域的把握（全体についての大まかで混沌とした見方）を安んじて体験していない可能性が示唆された。

事例13は、自分の内面に葛藤体験する領域をもたない。ネガティヴな体験を遠ざけ、排斥しようとする心性がみられた。辻（2003）は、「子どもはネガティヴな体験をする『むずかる』という形でその体験を排斥しようとする。母親は、子どものネガティヴな体験を受けとめ、自分も体験するが、むずかる子に対して『むずかるな』と否定するのではなくて、むずかるままに『よしよし』と抱きかかえ、そのままポジティヴに包み返す。すると母親と合一化している子どもは、ネガティヴな体験を排斥せずに、内面に位置づける体験をすることができるようになる」と述べている。

以上のことから、3事例は、本来親から与えられるべき「原体験を受容的に受けとめれられた体験」を欠いている可能性が高いことが示唆された。

4．被虐待児の現実対処スタイル

このような背景を持つ事例にみられた現実対処スタイルには以下のような特徴がみられた。

①対象との直面化の回避

事例8、事例10に顕著に見られた、カード受け取り直後のカード回転は、与えられた状況をそのまま受け入れない姿勢の表れである。特に事例10は反応産出がスムーズでなく、検査者の指示待ち態度で、受身的態度とも受け取れるが、一方で他者操作的とも言える。事例10は時間をかけて課題と向き合う粘り強さも持っている。事例13もカード回転は多く、3事例とも、検査という課題には回避することなく取り組み、自らがイニシアティヴをとり、能動的に環境を変化させ、対処しようと試みている。

事例10には横顔認知が多く見られ、対象と正面で向かい合うことで生じる緊張感をかわしている。また、事例8や事例13は、対象明確化を避けることが多く、対象と対峙することを回避している。事例13は、「かわいい」「きれい」など肯定的意味づけが多く、ネガティヴなものを否認している。終始笑顔でハイテンションな受検態度は、反動形成とも受け取れる。

②孤立化防衛（isolation）

事例8、事例10の対象認知は、1つの領域に1つの反応を断定表現で述べることが多く、1つのものには1つの意味づけしか考えられない、具象認知である。

また、決定因は形体単要因がほとんどで「形的にそう思っただけ」と、輪郭線のみが拠り所で、内実は「空」である。特に事例10は対応範囲をｄやｄｒに狭く限定し、単純化することで、より確実性を高めている。領域を小さくすることは、ブロットの色彩や陰影などの情緒刺激を分離し、輪郭線のみに注目し、論理的、客観的に現実対処することにつながる。このような思考と感情の切り離しは、単語・短文で余計なことは言わず、中立性を守り、感情を交えない反応態度や、色彩反応の少なさ、反応内容に生命体であっても部分反応が多いこと、または脱生

命化されたものが多いことにも表れている。

正確な現実認知は、論理的、客観的な洞察力を育み、問題の多い家族から自立をすること（独立性）につながる力となる。

③関係性を求める

事例 13 は、感情表出が活発な点で他の２事例とは対照的である。過剰適応といえるほどの笑顔での受検態度、反応内容の肯定的意味づけは、他者からの肯定的な注目を浴びようとする試み、承認欲求の表れといえる。事例 13 は周囲の状況には非常に敏感で、「つながり」を重視している。

事例 10 も、検査者のほうを見る、検査者に見せて説明するなど、常に他者を意識した態度で、自分を援助してくれる他者を求めている。

５．虐待サバイバー事例の検討

次に、虐待サバイバー事例のロールシャッハ反応を検討した。

虐待サバイバー群　事例Ａ（16 歳　女性）

背景

両親より身体的・心理的虐待を受けて育つ。中学時代に妊娠し、周囲の反対を押し切って出産。実家で生活するが、家族とトラブルが絶えず、母子寮に入る。情緒不安定を主訴に精神科を受診する。

ロールシャッハ反応（抜粋）

Ｉカード

2″ 何でもいいんかな？6″ いっぱい言っても？8″ ①魔女②虫と、何やろ 18″ ③この世におらへん動物やけど猫みたいな。30″ ④鳥 38″ 横にしたり？＜∨49″ ⑤お城 1′ 00″（終わってもいいよ）＞1′ 08″ ⑥葉っぱ 1′ 52″ これぐらいかな。

①【D:F:+, , ,1 : (H) : AS】
②【D:F:+o, , ,2 : A : AS】
③【WSs:F:+, , ,1 : (dA) : CS】
④【WSs:F:-2, , ,- : A : AS】
⑤【WSs:F:+o, , ,1 : Arch : AS】
⑥【WSs:F:pm, , ,0 : Plt : AS】

スコア集計

R=38 TT=8′ 53″ R_1T AV=5.8″ RC AV=1.3, W=23 D=14 S=6, FM=2 FV=1 F=32(84.2%) FT=2 C´F=1 C=1, F+%=55.3% Fpm%=18.4%, loosely org.=1, AS=97.4%

反応の特徴

・「何でもいいんかな？いっぱい言っても」と貪欲で、反応数は多く、心的エネルギーは高い
・よく吟味せず、思いついたまま、衝動的、継時的に反応
・全体を網羅しようとする要求水準は高い
・カード回転も自発的に行い、外界に主体的・能動的に関わる力を持っている
・形体と複合した色彩反応がない。質に違うものを統合する力は、まだ育まれていない
・許容反応(Fpm)あり（「葉っぱ」「岩」「雲」）
・非現実的な人間反応多く、ファンタジーの世界に親和性
・「人に踏まれたりしてボロボロ」など毀損内容みられ、傷つきを表現している
・断定型が多く、自分がなぞらえてみている気づきは乏しい

虐待サバイバー群　事例Ｂ（32 歳　女性）

背景

両親より身体的・心理的虐待を受け、知人から性的虐待も受ける。小学生の頃より、心身症、不登校で受診や施設入所も経験する。気分の変動が激しく、身体症状も持続している。出産・育児を契機に、子ども時代の記憶が再燃し、情緒的に不安定となる。

ロールシャッハ反応（抜粋）

Ｉカード

印象で？自分の印象で？（「何に似ていると思うか答える」と教示を繰り返す）20″ カブト虫みたいな。元気がなくなったベランダとかに居そうな。遠目から見たかんじですけど、そんなイメージがします。50″ Imp.個人的なことなので何が見えるか。②岩の間から見てる感じの風景とか隙間からのぞけるような高いところの変形した岩にも言える(カードを置く)2′ 09″ もうないです 2′ 19″

①【W:F:-2,∓ , ,- : A : CS】
②【Wss:V/F:pm,∓ , ,0 : Rock : CS】

スコア集計

R=15 TT=14′ 49″ R_IT AV=19.9″ RC=0, W%=100%
S=6, M=1 FM=3 m=2 FV=3 F=7(46.7%) YF=1
FC´=1 FC=2 C/F=1, F+%=80% Fpm%=18.4%,
loosely org.=2 disharmony org=1, sp∓=4
CS=73.3%

反応の特徴

・開口一番「自分の印象で？」と、自分を頼りにしての判断に自信が無い。「～にも見えるし～にも見える」と決められない。両価的な対立対極論理に支配されていて、結局決めないままの不安定な状況にいる。自己決定・自己決断するという主体的作業から引き下がっていて、対象および自己の定位および明確化がなされていない(as if personality)。
・カード回転はなく、置かれた状況に受身的になりやすく、能動的に状況を操作する力は弱い。受身の運動反応が多く、「見られ」「圧倒され」「逃げられない」無力感を感じている。
・反応領域は全体反応 100%で、反応決定因・反応内容は多彩であり感受性は高い。強迫的・完全主義的である。
・個々の認知は正確で形体水準は高い。
・Ⅰカード自由反応段階「甲虫、元気がなくなった」→質疑段階「蝉の殻、破れて、損傷している、汚くなった」と変化。自虐的に衰微表現を加える。弱々しさ、傷つき、空虚感、寂しさといった自分の心情を投影した表現多く、表現する力を持っているともいえる。
・「遠目から見た感じ」「岩の間から見てる感じの」と、対象から距離を置いた、おそるおそるという反応。見ている、覗いている主体と認知対象の岩や風景との距離・視点の整合性がなく、また分離・独立もしないまま混交している
・自己の内面の連想過程をそのまま継時的に表出し、自分の中である程度、考えをまとめてから表出するという内的作業が弱い。述語が優位で、主語・主体の自覚・認識が弱い。
・以上の不具合に、「現実離れ、イメージ、ふしぎ、見かけたことない」と単に言葉のレベルで合理化しているにすぎない。
・色彩反応は「リボン」と「火」のみ。情動統制は不良。「湧き出てきた水（Ⅸカード)」など、自我統制の及ばない緊張感・衝動性を抱えている。
・許容反応（Fpm）あり（「岩」「水」）

虐待サバイバー群の**事例 A** は中学生で出産し、子どもを福祉施設に預けるか否かという瀬戸際に立たされたが、福祉機関や医療機関に自ら援助を求め、サポートを受けながら、育児を続け、自己実現を果たしながら、実家との関係も徐々に修復していった事例である。反応数（R）が多く心的エネルギーが高いところ、そして外界に主体的・能動的に関わる力を持っているところに、彼女の現実場面での逞しさが現れている。

事例 B は、全体反応（W%）優位で、置かれた状況に受動的で過剰適応がみられる。今もなお親からの支配・依存関係から分離できない葛藤を抱えているが、現実認知の正確性(F＋%)に支えられ、「この子には私と同じ思いをさせたくない」と虐待の世代間伝達を意識的に回避した。事例 B は、他界した祖母との安定した依存関係を経験していたことを付け加える。

6．レジリエンスをもたらすもの

虐待の世代間伝達について、鵜飼(2000)は、「われわれは、児童虐待は常に世代間で伝達すると自動的に考えるのではなく、その親がいかに自分の生活史を受け入れているかによって示される個人の内的表象の問題、あるいはいかに自分の葛藤を克服しているのか、またどれだけの社会的、経済的サポートを受けることが出来ているのかなどという複雑な諸問題の関係のなかで捉えるべきであろう。重要なことは、過去に虐待を受けていたという『事実』ではなく、それを現在、どのように受けとめているのかという『表象世界』である」と述べている。

また、Grotberg(1999)は、「レジリエンスとは、逆境に直面し、それを克服し、その経験によって強化される、また変容される普遍的な人

の許容力である」と定義づけた（小花和 2004 より再引用）。そしてレジリエンスがストレッサーをはねつける防御因子やストレス状況に対抗しようとする単なる「耐性」とは、さらに異なる概念であると述べている。そのようなレジリエンスをもたらすものは何かについて考察を加える。

①「傷つきを受けとめる力」

先述した施設群の反応特徴の中で色彩反応が少ないことを指摘した。色彩反応は受動的で直接的・即座的な外在する刺激に反応することの許容性を示すものである。彼らの現実対処スタイルの一つとして、孤立化防衛(isolation)を挙げ、思考と感情の切り離しが行われていることも指摘した。このように傷つくことを避けることも一種の力といえる。

しかし、自分の傷ついた人生を自分のものとして引き受けて乗り越えていくためには、傷つき体験を避けては通れない。臨床群では、周囲の状況性に敏感となり、形体との複合は未成立で情動統制は十分ではないが、色彩に実質的意味づけをした色彩反応がみられるようになった。また、虐待サバイバーの事例では「傷ついた対象表象」を反応内容にも投影していた。このように、たとえそれがネガティヴなものであっても、しっかりと感受して「傷つく力」、そしてそれを「表現する力」は後の回復につながるものと考えられる。

②「許容反応（Fpm）を産出する力」

阪大法では、形体の規定度が低い反応に対して許容反応（Fpm）というスコアを用意している。スコアで見れば、施設群にも出現はしているが、「宇宙人」などの具象概念が多く、不定形体概念の Fpm は少ない。全体を通して、(W),Fpm とスコアされるような不定形体概念の融合的大域的把握の体験がなく、辻(2003)のいう「原体験」を受容的に受けとめられる体験を欠いていた可能性が示唆された。「原体験」を受容的に受けとめられた体験は、安心して外界に関われる、自分の感情を表現されることを許されるという基本的信頼感につながるものである。

また、Fpm は、何であるかはっきりしないままの体験を自らの中に収めることで、いろいろな意味可能性を知る体験につながり、また、目に見えない心のはたらきに気づく力といわれている。認知が具象に限定されていると、自分の心の領域で生じた葛藤を『自分の心の中の葛藤』として認知することができず、具象水準でしか理解することができないことになる。前掲の鵜飼（2000）の言葉を再引用すれば、「重要なことは、過去に虐待を受けていたという『事実』ではなく、それを現在、どのように受けとめているのかという『表象世界』であり」、思春期・青年期を迎える被虐待児にとって Fpm の出現に意味される体験の獲得と心の成長が重要になると考えられる。

【おわりに】

人間の生涯は、環境によって絶対的に規定され、全面的に支配されてしまうものではない。年齢によって影響を及ぼす要因は異なる。「潜在的に持っている要因」は生涯にわたって影響をおよぼすであろう。幼少期は、環境という「周囲から提供される要因」によって影響されるところが大きい。そして思春期・青年期以降、親からの自立を目指し、環境からの働きかけに対

して、自らを変容させる主体的能動的な営みの中に「自らが獲得する要因」が生じることも事実である。このことは、以下のように辻(2003)によって明確に述べられているところである。

「思春期・青年期以降になってくると、親から与えられていなかった与えられていることが望ましい体験は、自分が自分のために与えてやることによって、自立した存在になる。(略)力は自分がもっているのであるから、その力を発揮できるようになれないということはありえない。不利であっても、というよりは不利であるからこそ、その力を発揮できるようになれば、自立性はかえって高くなるといえる。自分が自分のネガティヴに感じている体験を、許容することに気づきさすればよいのである。それにはそれを実際に体験できている他者と、出会うことは大きな力となるに相違ない。」

被虐待児が彼らの生き残るためにとらざるを得なかった現実対処法の中には、不適切な対処法といわざるを得ない要素も存在する。しかし、傍らにいる援助者が、彼らの対処法をネガティヴなものとして排斥せず、「よしよし」と受け止め、彼らが自分の人生を受けとめる援助に力点を置く支援が、特に思春期・青年期以降には重要になると考える。子どものレジリエンスを信頼し、育めるよう支援する動きが展開されることを期待する。

【参考文献】

Cummings, E. M., &Davies, P. T., &Campbell, S. B. (2000) Developmental Psychopathology and Family Process-Theory, Research, and Clinical Implications. The Guilford Press. 菅原ますみ（監訳）(2006) 発達精神病理学 ミネルヴァ書房

Cruz, F. G. & Essen, L. (1994) Adult Survivors of Childhood Emotional Physical, and Sexual Abuse: Dynamics and Treatment. Jason Aronson Inc. 倭文真智子（監訳）(2001) 虐待サバイバーの心理療法：成育史に沿った包括的アプローチ 金剛出版

Grotberg, E. H. (1999) Tapping your inner strength. OaklandNewHarbingerPublication. (小花和 2004 より再引用)

Herman, J. L. (1992) Trauma and Recavery. HarperCollims Publishers. 中井久夫（訳）(1999) 心的外傷と回復 みすず書房

川口裕子・竹内直子・松浦加奈・小笠原將之・福永知子 (2007) 被虐待児のロールシャッハ反応にみられる現実対処スタイルの特徴 日本ロールシャッハ学会第 11 回大会

小松教之・長屋正男 (1981) 被虐待児の心理的特性－ロールシャッハ法を中心として 京都教育大学紀要, 59, 37-47.

前田研史 (2006) 被虐待児 氏原 寛ほか (編) 心理査定実践ハンドブック 創元社 190-193.

森川直樹 (1997) PTSD の一症例「全力をもって大人社会に挑戦している少女」 ロールシャッハ研究, 39, 17-30.

中原睦美 (2008) ロールシャッハ法に現れる虐待既往の特徴 平成 17 年度～平成 19 年度科学研究補助金(基盤研究(C))研究成果報告書

小花和尚子 (2004) 幼児期のレジリエンス ナカニシヤ出版

小川俊樹・松本真理子（編著）(2005) 子どものロールシャッハ法 金子書房

奥山眞紀子 (1997) 被虐待児の治療とケアー 臨床精神医学 26 (1) 19-26.

下西さや子 (2006) 被虐待児のエンパワーメント・アプローチ－子どもとリジリアンスの視点から－ 社会福祉学, 47 (1), 18-31.

坪井裕子・森田美弥子・松本真理子 (2007) 被虐待体験をもつ小学生のロールシャッハ反応 心理臨床学研究, 25 (1), 13-24

辻 悟 (1997) ロールシャッハ検査法 金子書房

辻 悟 (2003) こころへの途 金子書房

鵜飼奈津子 (2000) 児童虐待の世代間伝達に関する一考察 心理臨床学研究、18 (4) 402-410

和田野康子・柗岡敏子・長屋正男・福永知子 (2004) 幼児期に虐待を受けた子どものロールシャッハ反応－原体験の視点からの考察－ 日本ロールシャッハ学会第 8 回大会

Wolin, S. J. & Wolin, S. (1993) The Resilient Self-How Survivors of Troubled Families-Rise Above Adversity. Villard Books. 奥野光・小森康永（訳）(2002) サバイバーと心の回復力 逆境を乗り越えるための七つのリジリアンス 金剛出版